

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化

# 平成30年度 外国語活動のまとめ



○ 研究大会実践の解説

4年「友達に文房具セットをプレゼントしよう」

○ 研究大会の成果・課題を踏まえた実践

4年「オリジナルピザを注文しよう」

実践者 安彦 有里恵

# 平成 30 年度 附属函館小学校研究について

平成 30 年度 北海道教育大学附属函館小学校 研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化  
～「学びの文脈」に基づいた各教科等の単元のデザイン～

\* 課題設定の理由と研究の経緯 については、「研究のまとめ」を参照して下さい。

## 1. 「単元のデザイン」とは

### 単元のデザイン

単元の目標を達成する（≒「資質・能力」の育成を目指す）ために…

- ① 単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの**単元の構想**をする。
- ② ①を子供の**問題解決のストーリー**の視点で**整理**する。
- ③ 学びの文脈を生み出したり、つないだりする**支援**を**具体化**する。

まず前提として、授業づくりを行う時に重視しなくてはいけないのが、主体的・対話的で深い学びを通して、単元の目標を確実に達成することです。そのための、「単元のデザイン」は、本校では3つのステップにより行われています。

最初は、単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの単元の構想をします。学習指導要領の内容を確認したり、各教科書会社の教科書を比較したりすることなどを通して、どのような学びを展開すれば、単元の目標が達成できるのかを考えます。その時、単元の終了時における目指す子供の姿から逆算し、どのような過程を経てその姿になるかを構想することも重要です。このようにして、単元の構想をすることが、第1のステップです。

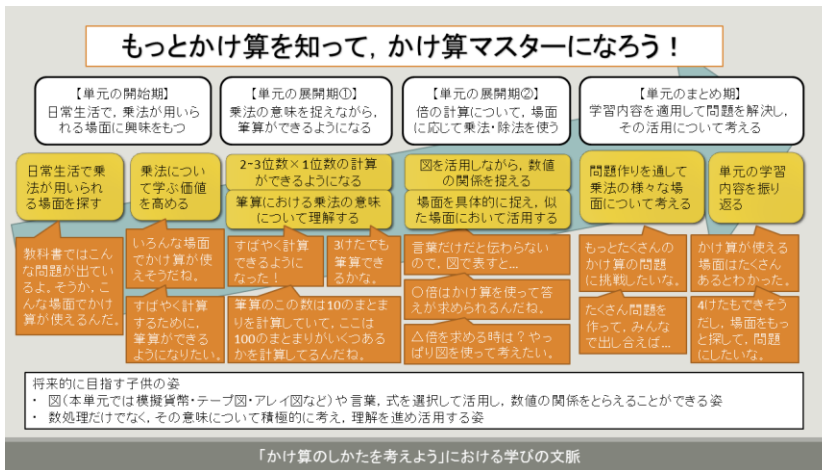
次は、その学習活動の流れを、子供の問題解決のストーリーの視点で、整理します。先述の通り、主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を獲得・育成していくには、子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」が重要になります。子供の実態を捉え、単元における問題（課題）を解決することに、必要感や必然性を感じるような単元になるよう整理することが、第2のステップです。

最後に、「学びの文脈」を生み出したり、つないだりするための教師の支援や手立てを具体化します。「学びの文脈」を通して、子供が主体的・対話的で深い学びをしていくには、適切な教師の関わりが重要です。それは時に直接的な関わり（対話や発問など）であったり、間接的な関わり（場の設定や環境整備など）であったりします。また、各教科等の特質や単元のもつ特性、児童の実態などにより、その手立ては多様になり得ると考えています。その手立てについて考え、単元の中で適切な支援ができるよう具体化していくことが、第3のステップです。

## 2. 単元における資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

- ① 教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる資質・能力（国語力・数学力など）
- ② 教科等を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される資質・能力（言語能力・情報活用能力など）
- ③ 現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な資質・能力（安全で安心な社会づくりのために必要な力など）

中央教育審議会答申（中教審 197 号）、p27



これまでの研究で、資質・能力の育成のために「学びの文脈」が重要であることはわかってきました。そして育成を目指す資質・能力については上の3つがあるとされています。

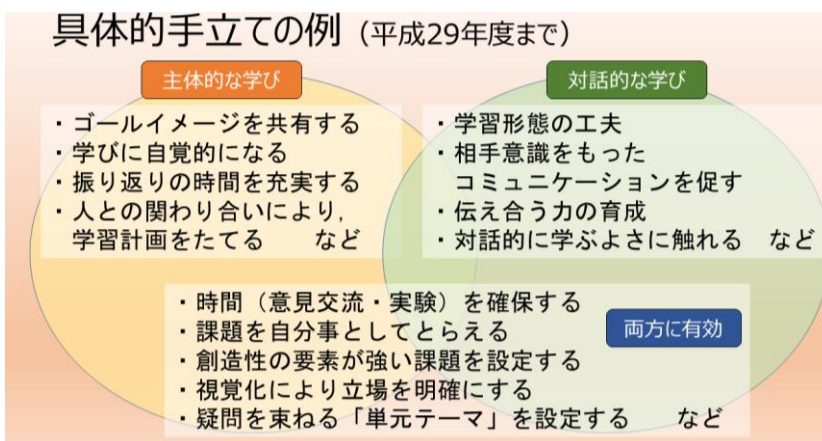
これまで本校では、「学びの文脈」は①の資質・能力の育成に資するものと考えてきました。

今年度は、本校において育成を目指す資質・能力の軸を①としながら、その単元で育成を目指す資質・能力

が②や③の資質・能力の育成にどのようにかわり、「学びの文脈」上でどのように表されるかを追究しています。

具体的には、単元の学習終了時や、その教科等を学び進めた時、あるいは将来的な（各教科等の目標に沿った）子供の姿として授業者がイメージし、それに向かう姿が見られようにすることに挑戦しています。そのために、指導案上で「学びの文脈」を図化することで、①の資質・能力の育成はもちろん、②や③の資質・能力とのつながりを捉えることができることを期待しています。

## 3. 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て



今回の研究では、これまでに行われてきた授業づくりにおける具体的な手立てを、各教科等の資質・能力の育成という視点からもう一度見直し、単元の学びをどのようにつないでいるのかを示すことに挑戦しています。これにより、授業にどんな学習活動を盛り込むことで「学びの文脈」を生み、資質・能力を育成することができるかを、より明確に見出すことができると考えました。

「学びの文脈」を”生み出す”ための手立ての多くは、単元や題材を選びません。また、教科等も限定されない（汎用性が高い）ことも多いです。例えば、「気づきを生む資料と出会う」ことや、気づきから「単元テーマ」を設定するなどの手立てです。その多くは教科横断的に活用できると言えます。

そして「学びの文脈」を”つなぐ”ための手立ては、各教科等の特質に応じて行われる（「見方・考え方」を鍛える）学びの場面で多く見られます。例えば、「教師との対話により目標に迫る」「既習との関連を明確にして統合的・発展的に学ぶ」などです。その多くは、より「深い学び」を実現する手立てとして、活用できると言えます。

# 外国語活動 研究大会実践の解説

単元名 4年「文房具セットをプレゼントしよう」

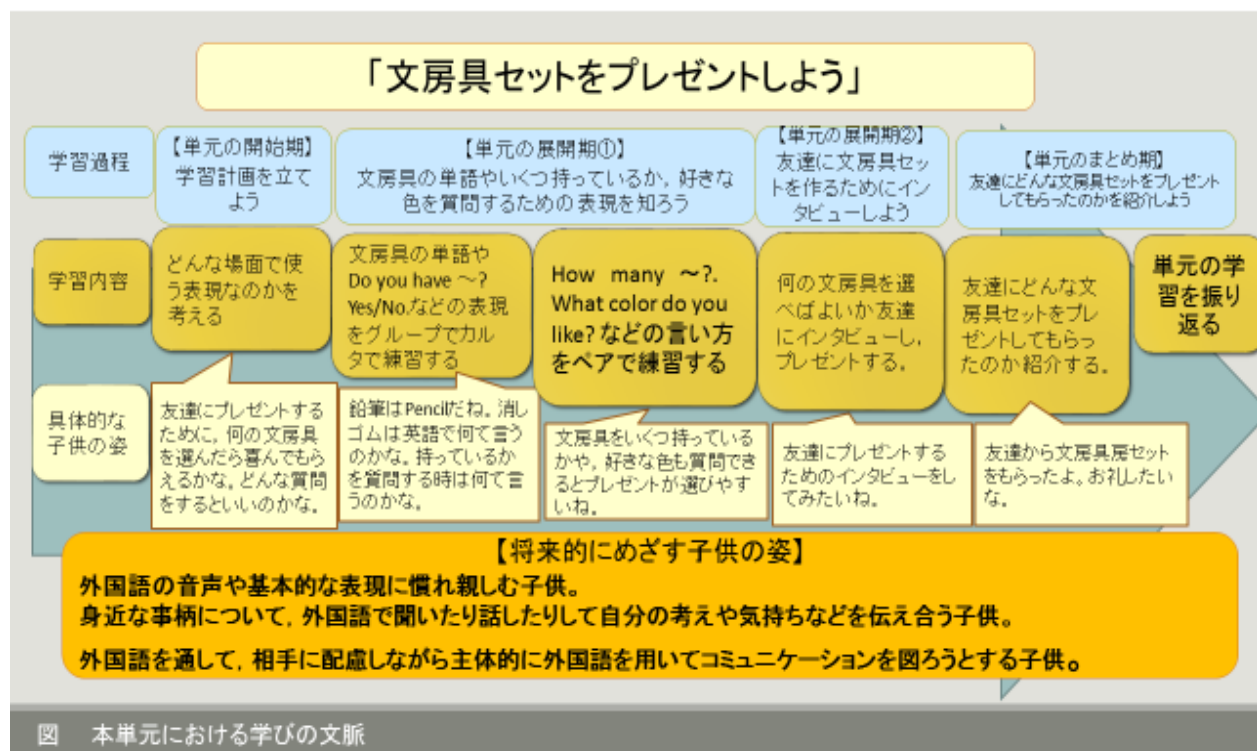
## (1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちに、

- ・ 文房具の種類や数、好きな色などを伝え合うための簡単な語句、表現を使って、友達に質問したり質問に答えたりする。
- ・ 友達のための文房具セットを作るために、どんな文房具を持っているか、どんな色が好きか等を考えて質問したり答えたり、文房具の紹介に必要な簡単な語句、表現を選んだりする。
- ・ 友達に贈る文房具を選んだり、もらった文房具を紹介したりするために、相手意識をもって伝え合おうとする。

という資質・能力を身に付けさせることができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

ア どんな場面で使う表現なのかを考える。	開始期
イ 文房具を表す語句や Do you have～? Yes/No などの表現をグループで練習する。 ウ How many～? What color do you like?などの表現をペアで練習する。 エ どの文房具を選べばよいか友達にインタビューし、プレゼントする。	展開期
オ 友達にどんな文房具セットをプレゼントしてもらったか紹介する。 カ 単元の学習を振り返る。	まとめ期



## (2) 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような3つの手立てを行いました。

### 手立て① 明確な単元のゴールイメージの設定、振り返りの活用

ア・カ 子供の主体的な学びを促すために、「友達の誕生日に文房具セットをプレゼントしよう」を単元のゴールとして設定しました。この身近な暮らしに関わる場面を扱うことによって、子供は課題を明らかにします。そして友達に文房具セットをプレゼントするために、鉛筆は何本持っているか、好きな色は何色かなどの相手の好み等に関心をもち、相手意識・目的意識を明確にしてプレゼントを選ぶなど見通しをもって学ぶことができると考えました。



また、子供が学習を振り返り、成果を実感し次のめあてを設定できるよう、振り返りカードの中にわかったことや次に生かしたいこと等の項目を設けました。これにより、子供の必要感に応じた学習を展開できるようにしました。

### 手立て② インフォメーションギャップを埋め合う会話場面の設定

イ～エ いろいろな友達と会話をする必要感をもつことができるよう、プレゼントをする相手をくじで決めました。くじでプレゼントをする相手が決まることで、友達が持っている文房具の種類や数、好みなどがわからないから、質問したいという思い（インフォメーションギャップを埋め合う必要性）が生まれます。そしてそれらを知るために友達同士で情報収集を行うと考えました。



### 手立て③ 相手意識を高めるポイントの設定

イ～オ 子供たちが相手意識を高め、相手に配慮しながら伝え合うことができるよう、会話する時に大切なポイントを設定しました。例えば greeting, eye contact, smile, clear voiceなどを意識しながら伝え合う学習を続け、自分の考えや気持ちが伝わり、相手にわかってもらえるような会話を目指しました。



また、友達の会話を見ることで、どんなところがよかったかを全体で共有し、ポイントを自分の会話に活かしていけるようにしました。これにより、相手意識を働かせながら行う会話を目指しました。

# 研究大会実践の成果と課題

## 成果

この実践を通しての成果は、子供の主体的な学びを促すために、「友達の誕生日に文房具セットをプレゼントしよう」を単元のゴールとして設定したことで、子供が相手意識、目的意識を明確にしてプレゼントを選べたことです。さらに、友達のために文房具セットを選ぶために、友達に好きな色や文房具を持っているか尋ねるとよいのではないかなどと、課題を明らかにして学習を進め、見通しをもって学ぶことができました。また、友達の好みをもとに文房具を選び実際にプレゼントする学習から、相手が喜んでくれるようなプレゼントをしたいという思いをもって会話をすることができた子供の姿が多く見られました。

また、振り返りの活用に関しては、例えば、「好きな色を質問するための表現がわかったから、友達の好きな色を質問して文房具を選びたい。」と振り返る子供が前時までにたくさんいました。その子供たちの振り返りから、本時では「たくさんの友達と会話をしたい。」という学習活動につながるよう促すことができました。また、「今まで学習した表現を使って、文房具セットをプレゼントしたい。」と振り返った子供の言葉から、本時における「友達にインタビューしたことをもとに、文房具セットをプレゼントしよう」という学習課題につなげることができました。振り返りを生かして子供の必要感を見取り、それに応じた学習を展開できたと考えます。

「インフォメーションギャップを埋め合う会話場面の設定」に関しては、くじでプレゼントする相手が決まることで、相手の好みがわからないから、質問したいという思いが生まれ、友達が持っている文房具の種類や数、好みを知るために友達同士で情報収集を行うことができました。例えば、文房具を選ぶときの参考にできるよう、“What color do you like?”等とさまざまな友達に進んでインタビューする姿が見られました。

「相手意識を高めるポイントの設定」に関しては、相手意識をもって学習を進めることで、「会話をするとき気持ちを含めると相手がとても喜んでくれた。その姿を見て自分も楽しかった。」と振り返る子供が多くなっていきました。また、「〇〇さんの会話が大きな声で笑顔がとても良いと思う。次は〇〇さんのように会話をしたい。」という会話ポイントに当てはまる友達を見つけ、自分の会話の参考にしたいという思いをもつ子供が多くなりました。こうしたことから、気持ちの良いやり取りの姿を求める会話をする子供が増え、英語を使って主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれていると感じました。

## 課題

手立て①の課題は、子供たちの好きな色が様々あることから、一人一人の好みの色に合わせた文房具をすべて準備することができませんでした。そのため、相手の好きな色の文房具がない場合、希望にあう別のプレゼントを贈ることができるように、他の文房具を持っているか、別の色は好きかといった質問をするようにしました。



手立て②の課題は、くじで会話する相手が決まってしまうことで、対象者が限定されてしまうということでした。くじを取り入れることによって、いろいろな友達の好きな色や文房具についての情報を集める必要感をもつことができます。しかし、普段の学習でいろいろな友達と会話することに慣れ、いろいろな友達と交流したい気持ちが高い子供にとっては、くじで会話をする相手が限定されることで、もっとたくさん友達と会話をしたいという思いをそいでしまうことになりました。そこで、本時では、くじで会話する相手を決める活動を1回行い、その後は自由交流の場面を設定し、くじで決まった相手とも、実際に話したい相手とも会話を行うことができるようにしました。



## 実践提案「目的意識や相手意識のある対話を大切にした単元づくり」

単元名 4年「オリジナルピザを作って紹介しよう」

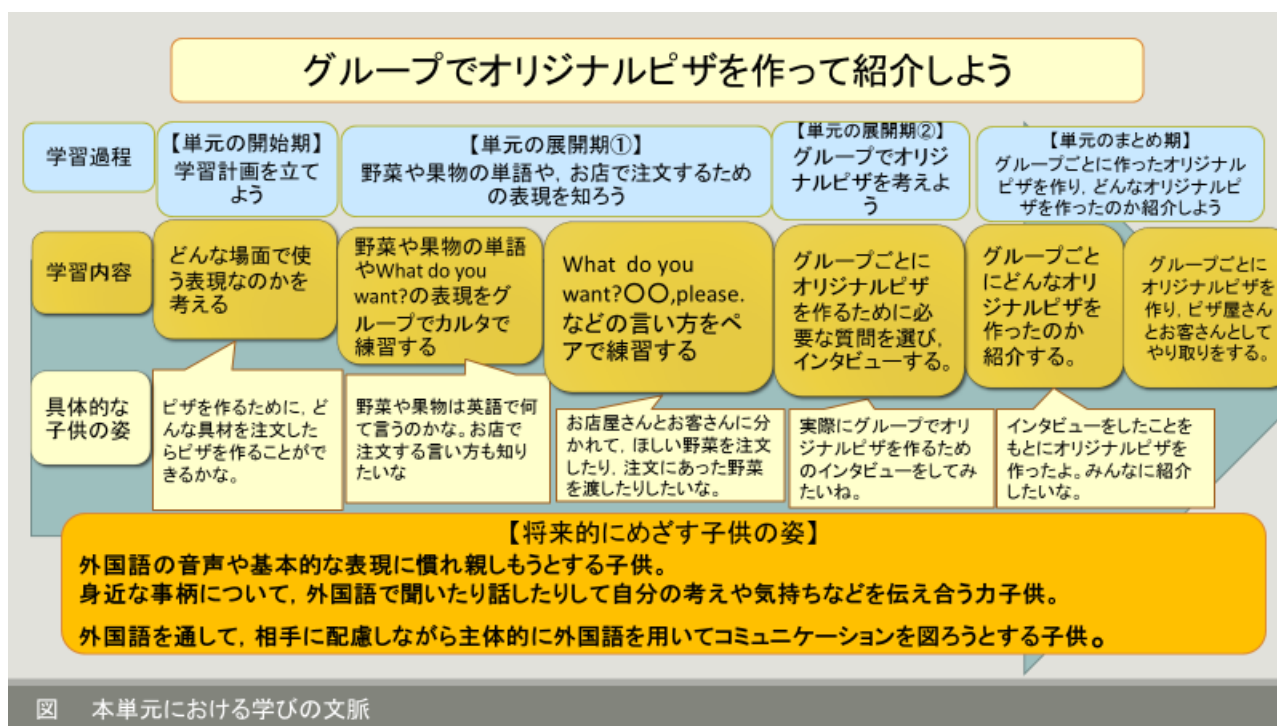
### (1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちに、

- ・ 欲しいものを尋ねたり要求したりする。
- ・ 欲しい食材などを尋ねたり要求したりするとともに、考えたメニューを紹介し合うことができる。
- ・ インタビューしてわかったことをもとに、相手に配慮しながら自分たちのオリジナルピザを紹介しようとしている。

という資質・能力を身に付けさせることができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

ア どんな場面で使う表現なのかを考える。	開始期
イ 野菜や果物の名前や What do you want?の表現をグループで練習する。 ウ What do you want? OO, please.などの言い方をペアで練習する。 エ グループごとにオリジナルピザを作るために必要な質問を選びインタビューする。	展開期
オ グループごとにどんなオリジナルピザを作ったのか紹介する。 カ グループごとにオリジナルピザを作り、ピザ屋さんとお客さん役としてやり取りをする。	まとめ期





## (2) 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような3つの手立てを行いました。

### 手立て① 子供の主体的な学びを生み出す、場面設定の工夫・振り返りの活用

ア 子供の主体的な学びを促すために、「オリジナルピザ屋さんにようこそ」という場面を設定しました。お客さんと店員さんの会話という身近な場면을扱うことによって、子供は課題を明確にし、見通しをもって学ぶことができると考えました。クラスの友達のためにオリジナルピザを作る目的があることにより、好きな野菜は何か、好きな具材は何かなどの相手の好みを聞いていくなど、相手意識、目的意識を明確にしながらオリジナルピザを考えることにつながると考えます。

また、学習の振り返りを活用し、子供が成果や次のめあてを明確にできるよう、振り返りカードの中にわかったことや次に生かしたいこと等の項目を設ける工夫をしました。その振り返りから、子供の必要感を見取り、子供の必要感に応じた学習を展開できると考えました。

### 手立て② 必要感のある会話場面の設定

イ～カ 必要感のある対話を繰り返すと、自ずと語句や表現に慣れ親しむことができると考えます。そこで、ペアやグループ、いろいろな友達との組合せで、店員さんとお客さんという役割分担を行い、やり取りする場を保障しました。役割を果たすために友達とのやり取りを通して、食材を表す語句の言い方や、欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむことができると考えました。

### 手立て③ 相手意識を高めるポイントの設定

イ～カ 相手意識をもちながら学習を進めることを継続して行うことにより、友達と会話したいという思いを強くしたり、会話する相手の気持ちを考えたりすることの大切さを考える子供が増えてきていると感じています。そこで本実践においても、相手意識をもちながら学習を進めることを継続して行うことにより、友達と会話したいという思いを強くしたり、会話する相手の気持ちを考えたりすることの大切さを考える子供が増えてきていると感じています。会話する時に大切なポイントを設定しました。例えば greeting, eye contact, smile, clear voiceなどを意識しながら学習を続け、自分の考えや気持ちが伝わり、相手にわかってもらえるような会話を目指しました。

また、友達の会話を見ることで、どんなところがよかったかを全体で共有し、ポイントを自分の会話に活かしていけるようにしました。これにより、相手意識を働かせながら行う会話を目指しました。

# 今年度の研究を通して

## 成果

子供の主体的な学びを生み出すため、単元構想の工夫は効果的でした。「友達に文房具セットをプレゼントしよう」や、「オリジナルピザを作って紹介しよう」という単元の明確なゴールイメージをもつことで、子供は必要感をもって学習することができました。例えば、友達の好きな色を知るためにインタビューをし、その結果に合わせて文房具を選んでプレゼントするというように相手意識をもって学習を進めることができました。

さらに対話的な学びについても、子供は必要感のある友達とのやり取りを行うことができました。ペアやグループ、いろいろな友達などと、目的達成のためのやり取りを行う場を保障することにより、子供は会話に必要な文房具や食材の言い方や、欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむことができました。やり取りの中で必要な語句・表現を繰り返し聞き、声に出すことにより、耳で音声に慣れ、言葉での発音につながっていったと考えます。

会話する時の大切なポイント（greeting, eye contact, smile, clear voice）を継続して設定したことも効果的でした。友達と会話したいという思いを強くしたり、相手と気持ちの良く会話をする大切さを考えたりする子供が増えてきたと感じています。また、友達の会話を見ることで、どんなところがよかったかを全体で共有し、大切なポイントを自分の会話に活かそうとする子供が増えたように感じました。

## 課題

今年度実践した中で課題となったこともあります。子供が好きな色や食材について質問し合った結果、友達の多様な好みを知ることができました。しかし、一人一人の好みにあわせた文房具や食材をすべて準備することはできませんでした。実際の買い物場面を想定して、自分や友達の好みに合う色の文房具や食材がない場合は、別の好きな色を質問したり、店の中にある食材の中から選んで注文したりするよう促しました。

グループでオリジナルピザを作る場合、相手に喜んでもらえるようなトッピングの食材を考えてピザ作りをしました。例えば友達が喜んでくれそうなピザにするために、実際にクラスのみんなに好きなトッピングをインタビューすることでオリジナルピザを作ることができたグループがありました。一方で、外国人観光客が喜んでくれそうなオリジナルピザを作った班もあり、その班の子供は、函館の名物を選びオリジナルピザのトッピングにしました。しかし、実際に外国人観光客がそのピザを喜んでくれるのかを知ることはできず、そのオリジナルピザにどんな反応をするのか知りたいという子供たちの振り返りが出ました。外国人観光客にとって喜んでもらえるだろうと思って作ったオリジナルピザは、実際に外国人観光客が喜んでくれるかどうか反応を確かめるための場の設定については課題として残りました。

## 実践を踏まえての展望

今年度の実践から、得られた成果を今後の学習に生かしていきたいと考えます。

一つ目の成果としては、授業の中で、教師とALTが、子供たちの良い会話モデルを紹介する場面をもったことです。例えば、授業で学習した文を正しく英語で言うことができた子供や、相手の話している英語を聞いて適切に反応ができていた子供がいたことがあげられます。子供たちの会話を通して、語句・表現を繰り返し聞く練習になると考えます。また、良い会話モデルを視聴して、同じクラスメイトのがんばりを身近に感じ、興味をもって会話をしようとする意欲を高めることにつながりました。これからの実践にも積極的に取り入れていきたいと思えます。

二つ目の成果としては、授業の振り返りの場面での友達のよさを認め合う場面です。振り返りの中で友達の学習の様子を紹介する場面をもち、「知識・技能」が身に付いている子供や、「思考力・判断力・表現力」を働かせている様子を子供たち同士で捉え、伝え合うことができていました。今後も英語の学習をしていく中で、このような活動を行うことで、友達の良さを自分の会話の中にも取り入れようとする子供たちが増えると考えます。そこで大切になることは、自分の考えをしっかりともつことと、友達に伝えても受け入れてもらえるという関係作りをしなければ会話は成り立たないと思えます。子供が認められる場面をもつことで、資質・能力を高め合う学級の雰囲気醸成されていたことを感じることができました。これからの実践にも取り入れていきたいと思えます。

今後取り組んでいきたいことの一つ目は、自分の考えをもって会話をするのが難しい子供への支援です。これまでの実践において、自分の考えをもつことに時間がかかる子供の場合は、英語の学習においても会話をするに苦手意識をもってしまっていました。そこで、自分の考えを明らかにするために、単元の開始期にワークシートに自分の考えを書いてから交流をするようにしました。自分の考えが明確になってから学習を進めることができたことで、会話することに抵抗がなくなってきたように思います。また、英語の学習だけでなく、他教科の学習でも自分の考えを明確にしてから交流することで、自分の考えを意欲的に伝えることができるようになるかを明らかにしていきたいです。

また二つ目として、継続して取り組んでいきたいのは、子供の見取りを工夫して行うことです。特に、自由交流になった時にすべての子供の会話を見取ることは大変難しいです。そこで、今後の実践では、語句や表現の定着が図られるよう、ペアやグループなどの決まった中でやり取りの中で子供の見取りを行うことを大切にしていきたいです。また、振り返りカードの記入からも、定着が図られているかを見取っていききたいです。自由交流では、これまでの学習での様子から、見取りを行う児童を数名しぼっておくことで定着度を見取ることができると考えます。特に開始期から、苦手意識をもっている子供などに注目し、必要な支援を行えるようにしていきたいです。また、展開期では、定着が図られているだけでなく、相手意識を大切にしながら会話しているかという視点で見取り、子供たちの良さを学級全体に伝えていけるようにするとよいと思えました。単元全体を通して、単元の目標や学習のめあてと照らし合わせながら効果的な見取りの方法を明らかにしていきたいです。